●せいてん質問箱

「親鸞一人がため」って、自己中心的では？

●質問●
親鸞聖人は、〈如来の本願は私一人のためにある〉と言われたそうですが、しかしそれは〈自分さえ救われればいい〉といった自己中心的な考えなのではないでしょうか？

□『歎異抄』の言葉

ご質問にある親鸞聖人のお言葉は、『歎異抄』に、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」（八五三頁）と示されているものだろうと思います。あまりにも有名なお言葉ですので、ご法話などでお聞きになられたのかもしれません。この言葉の前には、「聖人のつねの仰せには」とありますから、日頃よりのご述懐と考えられます。

一方、如来の本願には、「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ずずは、正覚を取らじ」（一八頁）とあり、すべての世界の生きとし生けるものを救いとろうと誓われていることがわかります。本願には、すべてのものを救いとると誓われているのに、「親鸞一人がため」と受け取られたのはどうしてでしょう。

□如来の本願と私のありよう

この五劫思惟の願には、十方の衆生に対して本願を信じただ念仏して浄土に往生せよと誓われているのですが、聖人が、「さればそれほどの業をもちける身にてありけるを」と述懐されているのですから、「私がそれほどに重い罪を背負う身であった」ことが、如来が本願をそのような内容で建立されたことの理由と聖人は考えられているのです。つまり、五劫の思惟も、十方衆生とのよびかけも、本願を信じただ念仏して往生せよとのお誓いも、そのような誓願でなければこの私を救いとることはできなかったと聖人はいわれているのです。

□「十方衆生」とのよびかけ

「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（八三三頁）とのご述壊も『歎異抄』のお言葉ですが、それほどの身の上である私が救われていくために、如来は五劫の間思惟され、念仏一つで往生させるという他力易行の本願を建立されたのです。十方の衆生に対して、無条件で救い取ると誓われているのは、念仏の法の普遍性を表していますが、そのことをそのまま、「親鸞一人がため」と聖人は受け止められたのです。

もし「十方衆生」と誓っておられなかったらどうなのでしょうか。そこになにがしかの条件があって、それを満たすもののみ救いとるというのであれば、私は果してその中に入っているのでしょうか。あるいは一万人だけ救うといわれていたなら、私はその中の一人となり得るでしょうか。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」というご述壊は、どのようなものであれ、何かの条件が満たされてはじめて救われるのであれば、私は確実に救われない側の人間であるということでしょう。十方の衆生に対して無条件に救うと誓われてはじめて私がその救いの中にいることができる、その思いが「ひとへに親鸞一人がためなりけり」というお言葉になり、「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と喜ばれているのだと思います。

□「救われる」ということ

この問いに答えるには、もう一つ、「救い」とは何かということも考えておかなければなりません。ご本願に示されているとおり、私たちは本願を信じただ念仏して浄土に往生させていただく、それ以外にはありません。そして浄土に往生させていただくことは、そのまま私が仏とならせていただき、迷いの世界に還って、人びとを救いとることに他なりません。煩悩を具足する私が大慈悲の仏とならせていただくからこそ、「救われる」といえるのです。

□浄土の慈悲

この慈悲について、同じく『歎異抄』には、「浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべき」（八三四頁）と述べられています。

仏教では一般的に、「慈」とは「衆生を愛念し、安穏と楽事をもって利益すること」であり、「悲」とは「衆生を愍念し、抜苦をもって利益すること」と解されています。ただあわれみ、いつくしむのではなく、生きとし生けるもの、すなわち、悩みを抱え苦しみ悲しみを抱えて生きているすべてのものの心を知り、間違いなく救いとることをもって、慈悲というのです。それは、仏のみができることであり、とても凡夫の身の上で行うことなどできません。それどころか、煩悩具足で自己中心的にしか相手のことを考えられない私たちなのですから、他の人の悩みや悲しみというものを本当に理解することすらできないのです。「どれほどかわいそうだ、気の毒だと思っても、思いのままに救うことはできない」のが私たちのありようです。

しかし私たちは、「念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益する」ことができると、聖人はいわれます。つまり、私の命は浄土に往生し仏となる命であり、仏となって大切なものために生きることができる命であると如来の本願に誓われているのです。

そうした命を今、本願他力の念仏を申す中、如来に願われて生きている、それこそが浄土真宗の救いといえるのではないでしょうか。

□お念仏の仲間

「十方衆生」との説示は、たとえあなたがどのような世界にあってどのような命を生きていようとも必ず救うとの如来のよびかけです。そのご本願を「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と聖人がうなずかれたように、私たち一人ひとりもまた、私一人のためと受け取らせていただくのです。そして、同じく心を浄土に向け、お念仏申す仲間を、同行・同朋と親しくよばれていることも忘れてはいけません。私たちにはお念仏の仲間がいます。そして親鸞聖人のお手紙に示されているとおり、浄土はその仲間とともに歩みゆく世界であり、私の大切な人たちとふたたび会える世界です。そうした世界として浄土はわたしたちの大きな心の依り処となっているように思います。

如来のご本願はこの私こそを目当てとしておこされたものと受け止めさせていただく中に、私たち自身は自己中心的なありようのままに、自己中心的でない世界をいただいているといえるのかもしれません。

（本願寺派司教　安藤光慈）